



Title	モンテーニュにおける「見かけ」批判：パスカルとの対比において
Author(s)	山上, 浩嗣
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モンテーニュにおける「見かけ」批判 —— パスカルとの対比において ——

山上 浩嗣

拙論「パスカルにおける「見かけ」の批判¹⁾」では、主として次のことを指摘した。すなわち、パスカルは美貌の危険な威力と、その移ろいやすさ、空しさを強調していること、そのような外見の美への警戒は、言語表現は現実をありのままに簡潔に写し取ることによって美しくなる（ゆえに美辞はかえってその対象の美を損なう）という彼の言語観^{けが}にも通じること、また、彼において、惨めな外観、みすばらしい見かけ、汚れにこそ内面の偉大さが宿るという根本的な反外見主義が認められること、である。パスカルにおいてはつねに、可視的な仮象の世界が、それとは反対の価値をもつ不可視で真実の世界を隠しているのであり、われわれ人間は、神から啓示を与えられてはじめて、後者を見ることができるのである。

モンテーニュにおける「見かけ」の問題は、彼の懐疑主義的思想全体に関わる重要な主題となりうるが、ここではこの問題について、上記拙論の内容をふまえて、パスカルとの対比において重要となる次の三つの点についてのみ概観しておきたい。1. 外見の欺瞞、2. 美貌礼讃、3. 思考・表現の自然さの尊重、である。

1. 外見の欺瞞

以下は、「レーモン・スポンの弁護」の一節である。『パンセ』の「想像力」の断章（S78²⁾）の直接の典拠のひとつである³⁾。

哲学者を細い針金でできた目の粗い籠に閉じこめて、パリのノートルダム大聖堂の塔の上からつり下げてみよう。彼は明晰な理性によって、自分が落ちることはありえないと判断するはずだが、それでも、（彼が屋根葺き職人の仕事に慣れているのでなければ）これほど極端に高いところから下を見れば（la vue de cette hauteur extreme）、怯えたり震えたりするのを避けられないだ

1) 『Correspondances（コレスポンダンス） 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社、2020年2月刊、所収。

2) パスカル『パンセ』からの引用に際しては、次の版のテキストに従い、断章番号を記号S（Sellier）とともに示す（長い断章の場合は頁も示す）。Pascal, *Pensées*, in *id.*, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par Gérard Ferreyrolles et Philippe Sellier, Paris, Librairie Générale Française, «La Pochothèque», 2004.

3) 次の書は、S78に影響を与えた『エッセー』中の文章を15箇所挙げている（うちII, 12「レーモン・スポンの弁護」からは7箇所）。Bernard Croquette, *Pascal et Montaigne. Étude des réminiscences des Essais dans l'œuvre de Pascal*, Genève, Droz, 1974. 『パンセ』S78と『エッセー』II, 12の対照については、次も参照。前田陽一『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』東京創元社、1989年、255-258頁。

ろう。[...] [ノートルダム大聖堂の] 二つの塔の間に、上を歩くのに十分な広さがある橋桁を架けるとしよう。どれほど強靱な哲学的知恵も、その橋桁が直に地面に置かれている場合と同じように、その上を歩く勇気を与えてくれることはないだろう。(II, 12, Pl. 631-632 / VS 594-595⁴⁾)

哲学者が、その優れた理性によって、自分が立っているある場所を安全だと判断しても、それが高所であることで、やはり恐怖を覚えずにはいられない、という。パスカルにおいては、恐怖を与えているのは哲学者の「想像力」である⁵⁾。この哲学者は、自分がここから落ちる可能性を想像して震えている。一方、モンテーニュにおいて恐怖の原因はあくまでも視覚である。その場所の高さや、断崖絶壁の光景そのものが、理性の判断に抗して、哲学者の足を止めさせるのである。モンテーニュにとって、判断において、見かけは理性よりも大きな影響を与えている。

次は、「話し合う方法について」(De l'art de conférer⁶⁾)の一節だが、ここでも感覚による印象が、人の対象に対する判断を左右することが指摘されている。

感覚 (les sens) はわれわれに固有にそなわり、最初に判断を行う手段であり、ものごとをさまざまな外的なしるし (accidents externes) を通してのみ知覚する。[...] 人と対話するときも同じだ。相手の重々しい態度、衣服、裕福さが、空しく下らない話にもしばしば信用を与える。あれほど多くの部下を連れ、あれほど恐れられている人物が、一般人と異なる何らかの能力を内に秘めていないとは考えられないし、また、あれほど多くの肩書きや役職をもち、あれほど他人を見下したような横柄な態度の人物が、遠くからでもその人に挨拶し、誰にも重用されないような者と比べて、より有能でないと考えられない。そうした人々にあっては、その言葉のみならず、顔の表情までもが、しっかりと考慮され、尊重される。誰もがそこに何らかの立派で明確な意味を見つけようと躍起になるのだ。(III, 8, Pl. 975-976 / VS 930-931)

4) モンテーニュ『エッセー』からの引用に際しては、次の版のテキストに従い、出典を章番号と頁で示す。Montaigne, *Essais*, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Paris, Gallimard, «Pléiade», 2007 [略号: PL]. また、次の版の当該頁も付記する。Montaigne, *Essais*, édition de Pierre Villey, sous la direction et avec une préface de Verdun-Louis Saulnier, Paris, PUF, «Quadrige», 1992, 3 vol. [略号: VS].

5) 「十分すぎるほど広い板の上に世界で最も偉大な哲学者がいて、その下に崖があったとしよう。彼がいかに理性によって安全を確信していたとしても、想像力が勝ってしまうことだろう。多くの人々は、そのような状況を思い浮かべただけで、青ざめて冷や汗をかいてしまうだろう」(S78, p. 856)。

6) L・ティルアンは、ここでの conférer の語が、①討論する、②称号や価値を授与する、③ある作品の内在的な価値を、その外面的な効果とは独立に、類似作との比較によって検証する、という意味をすべて含んでいると指摘している。『エッセー』のこの章 (III, 8) では、おそらく③の意味との関連で、真理を語る者が正しいとは限らない (真理はたまたま発せられることがある) という命題がくり返し言明されている。次を参照。Laurent Thirouin, «L'Art de Conférer», in *id.*, *Pascal ou le défaut de la méthode. Lecture des Pensées selon leur ordre*, Paris, Champion, «Lumière Classique», 2015, p. 31-48. なお、conférer という語に関する同様の指摘は、次にも見られる。Marc Fumaroli, «De Montaigne à Pascal. Les humanistes, la science moderne et la foi», in *id.*, *Exercices de lecture. De Rabelais à Paul Valéry*, Paris, Gallimard, «NRF», 2006, p. 293-326.

ある人物の「重々しい態度」「服装」「取りまきの多さ」「肩書き」「見下した様子」「言葉づかい」「顔の表情」が、その人物への畏敬の念を引き起こすという。だが、モンテーニュは、「特別に偉い人々でも、じっくりと観察してみれば、たいていの場合、普通の人々となんら変わりはないことを悟った」(III, 8, Pl. 976 / VS 931)と告白している。ここでも、対象の見かけが理性や経験による冷静な判断をゆがめてしまっている。

そもそもモンテーニュは、「レーモン・スポンの弁護」において、事物の印象は、その事物の本質とはなんら関係がなく、主体の感覚がつくりだした虚構であるという根本的な外観批判をくり返している。事物の印象＝外観は、事物ではなく、それを見るわれわれに起因しているというのである。

ものごとがそのままの形と本質においてわれわれの内に宿らないということ、その本来の力と権威をもってわれわれのなかに入ってはこないということ、われわれはよく承知している。[...] 要するに、外界の事物はわれわれのおかげで、われわれの好む通りに、われわれのなかに宿るのである。(II, 12, Pl. 595 / VS 562)

われわれの想念 (*fantasie*) は、外界のものごとに対応するものではなく、感覚を介して知覚される。しかも、感覚は外界の事物そのものではなく、ただ自分の受け取った印象 (*leurs propres passions*) を把握するにすぎないのだ。そういうわけで、想念や表象 (*apparence*) は事物ではなく、感覚の印象と知覚 (*passion et souffrance*) に由来する。その印象と事物とは、まったくの別物である。それゆえ、表象によって判断する者は、事物とは別のものによって判断していることになる。(II, 12, Pl. 638 / VS 601)

われわれが事物を判断する際の見かけ (*apparence* : 表象) は、われわれのその事物に対する感覚の印象の反映であって、その事物の本質とはなんら関係がない⁷⁾。事物に対する好悪はそれを判断する主体によって異なるし、その主体の心身の状態

7) G・バガニーニは、モンテーニュの「現象主義」を指摘し、その原因の一端を、アンリ・エティエンヌによるセクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』の翻訳の影響に認めている。バガニーニは、下記のように論じている。モンテーニュは、エティエンヌによるセクストス『ピュロン主義哲学の概要』の翻訳の影響を受け、ギリシア語の *phainomena* (現象、現われ) という語の代わりに *apparence* を使用した。また、モンテーニュは、『ピュロン主義哲学の概要』の要約を提示する箇所（本稿直近の引用部分など）で、*phainomenon* を *apparence* と訳すと同時に、この語を *fantaisie* という概念と緊密に結びつけている。このことによって、モンテーニュは、ピュロン派の懐疑主義を「現象主義」へと立上げて上げた。現象主義とは、「見かけ」(*apparence*) と「現実」(*réalité*) の二元論に立ち、われわれは、事物の本質としての「現実」を認識できず、その「見かけ」(とりわけ感覚によって認識可能な見かけ) しか知ることができないとする考えのことである。次を参照。G・バガニーニ「モンテーニュと近代懐疑主義」山上浩嗣訳、『思想』2015年10月号(1098号)、7-24頁。Cf. 「さて、われわれはものごとを、自分に合わせて調整し、自分の都合で変えてしまうので、ものごとの真のあり方を知ることができない」«Or nostre estat accommodant les choses à soy, et les transformant selon soy, nous ne sçavons plus quelles sont les choses en verité» (II, 12, Pl. 637 / VS 600)。

によっても絶えず変化する。空腹時と満腹時、健康のときと病気のとき、好天のときと悪天のとき、機嫌がよいときと悪いとき、すべてに対する印象が、そのような状況の変化に左右される。モンテーニュは言う。「私のうちには、無数の突然で偶発的な衝動が生じている。憂鬱な気分になると思えば、いらいらした気分にとらえられる。いま私のうちに悲しみが支配しているかと思えば、たちまち喜びがみなぎってくる。本を読んでいると、ある箇所に心が魅了される素晴らしい文章を発見することがあるが、また別のときにその箇所に行き当たると、どれほどひっくり返し、こづき回し、いじくり回しても、それは単なる未知で不定形な塊にしか思えないのだ」(II, 12, Pl. 599-600 / VS 566)。

パスカルにおいて、外観は内実を隠す覆いであった。美しい見かけは醜い心を、みすばらしい容貌は美しい心を宿していた。そのことは、正しい目(「繊細の精神」「心の目」)で見れば明らかであり、その目をもたぬ者が「盲目」(aveugle)とされた。モンテーニュにおいては、見かけの奥にある内実は徹底的に不可知である。彼は言う。「すべてのものごとはわれわれから隠されている。それがいかなるものかをわれわれが確定できるものなど、何もない」(II, 12, Pl. 558 / VS 510)。「われわれは存在といかなる交流もない」(«Nous n'avons aucune communication à l'estre», II, 12, Pl. 639 / VS 601)。

そうである以上、われわれにとってあらゆるものごとは見かけがすべてである。結局のところ、見かけはいかなる内実も隠していない。見かけは主体が作り上げる虚構であるが、その虚構以外に本質はない。より正確に言えば、われわれはものごとの虚構以外に知ることができない⁸⁾。そしてわれわれは、その虚構を通して、ものごとに対する価値判断を行う⁹⁾。人がある人を好むのは、その人が美しいからではない。その人を愛するから、その人が美しく見えるのだ。弁護士が依頼人を信用するのは、その主張が正しいからではない。依頼人からたっぷり謝礼をもらうから、その主張が正しく思えるのだ¹⁰⁾。

2. 美貌礼讃

次に、美貌について。モンテーニュにとって、あらゆる現象は事物の本質とは関係なく、主体の作り上げた幻想である。しかもその現象は、たえざる変化にさ

8) 次を参照。J・スタロバンスキー『モンテーニュは動く』早水洋太郎訳、みすず書房、II「仮面を剥ぎ取ると」111-147頁。

9) 「だが、どんな学派でも、自派の賢者に対して、生きていくには、まだ理解も認識も合意もなされていないことがらに従うべしと命じざるをえない。たとえば、その賢者が航海に出たときには、自分の行いが自分に有益かどうかはわからぬままそれを進め、船の調子がよく、水夫が熟練で、時期もちょうどよいといった蓋然的な状況で満足し、明らかにそれに反する条件がないかぎり、そうした見かけ(apparences)に身をゆだねて歩み続けるのである」(II, 12, Pl. 533 / VS 505-506)。

10) 「弁護士に訴訟のことをただ単に相談するだけでは、曖昧でいいかげんな返事しか得られない。彼は双方のいずれを支持すべきかについて無関心であることがわかるだろう。そこで、彼にこの案件に食いつかせ、本気にさせるために、十分に金を払ってやりなさい。すると彼は興味を示し、熱心に取り組むだろうし、たちまち彼の推論も知識も活気を帯びるだろう。いまや、明白で疑えない真理が、彼の頭のなかに姿を現したのだ。彼はそこに新たな光を見だし、それを心から信じ、間違いないと確証しているのである」(II, 12, Pl. 600 / VS 566)。

らされている。モンテーニュはその上で、「美貌」という現象を高く評価する。

私が美貌という強力で有利な資質をどれほど高く評価しているかは、何度くり返しても足りない。ソクラテスはそれを「短い圧政」と呼び、プラトンは「自然の特権」と呼んだ。恩恵の大きさにおいてこれにまさるものはない。美貌は人の交際において第一位を占める。まっ先に目立ち、強大な力とめざましい印象とで、われわれの判断を導き、支配する。フリュネー〔アテナイの遊女〕は、いくら優れた弁護士を雇っていても、衣服をはだけて、その輝くような美貌で裁判官たちを抱きこまなければ、訴訟に負けていただろう。また、キュロス、アレクサンドル、カエサルという世界の三大支配者も、大事業をなすのに、美貌をないがしろにはしなかったと、私は考えている。大スキピオも同様である。[...] 私は、プラトンがある古代の詩人が挙げている流行歌に倣って、幸福の順番を健康、美、富の順としたことに、進んで同意する。また、アリストテレスはこう言った。「支配権は美貌の者に属するのであり、神々の姿に匹敵するほどの美貌の者には、神々と同等の崇敬を捧げなければならない」と。ある人がアリストテレスに、「なぜ美しい人は長くしつこくみなにつきまとわれるのでしょうか」と尋ねたところ、「そんな質問は盲人しかない」と答えた。もっとも優れた哲学者のほとんども、彼らの美貌という手段と恩恵によって授業料を支払い、知恵を獲得したのだ。(III, 12, Pl. 1105 / VS 1058)

モンテーニュは、プラトンとともに、美貌の威力を短期で過ぎ去るがきわめて強力であると認識している。この認識はパスカルと共通である。しかしその上でモンテーニュは、パスカルとは反対に、美貌を崇敬すべき価値であると位置づけている。このときモンテーニュは、美貌が効力を発揮する、訴訟や政治や戦闘や学問（やおそらく性愛）での成功を、喜ばしいものとみなしている。パスカルにおいてこれらの勝利は、「身体の秩序」において求められる目的にすぎないものとして一蹴されるべきものである。

ソクラテスは、あらゆる偉大な資質において完全な模範であった。伝えられるように、その彼が、魂の美しさにあれほど似つかわしくない醜い肉体しか与えられなかったことを、私は残念に思う。よりによって、あれほど美を熱心に愛した彼が、である。自然は彼を不当な目に遭わせたのだ。〈身体と精神が相互に均衡を保つということは、まことに真実らしい。〉〔キケロ『トゥスクルム論議』I, 33〕キケロはここで、手足の不自然さやゆがみによる醜さのことを語っているのだが、われわれは、主として顔に宿る、最初に目につく不調をも醜さと呼ぶ。それは、顔色、あざ、粗野な顔つきなどの些細な原因によってしばしば嫌悪感を催す。なぜだかわからないが、全体としてきわめて整った手足によってかえってそうなる場合もある。ラ・ボエシのきわめて美

しい魂を覆っていた醜さも、この種のものだった。この表面的な醜さは、ひどく強い影響力をもつが、[本人の] 精神状態に害を与えるわけではないし、人々の意見にもほとんど影響を及ぼさない。もうひとつの、奇形と呼ぶのがふさわしい醜さは、もっと実質的で、たいてい[本人の] 内面にまで影響を及ぼすだろう。よく磨かれた革靴と違って、よい形をした革靴はすべて、足の形をはっきりと示す。(III, 12, Pl. 1104-1105 / VS 1057)

ここでモンテーニュは、「身体と精神の相互の均衡」、すなわち「美しい精神は美しい身体に宿る」というキケロの提示する原則を「真実らしい」と認めた上で、ソクラテスとラ・ボエシの精神がその原則に適わなかったことを「残念」と断じている。モンテーニュは、それほどこの原則を強く信じていたということだ。この原則にあてはめれば、彼が敬愛する二人の人物が優れた精神をもっていなかったと疑う余地が生じてしまうのである。パスカルにおいて、立派な風貌は警戒の対象であった。モンテーニュにおいては逆に、優れた外見は精神の高邁さの証となる。すべて外貌が美しい人物の精神が立派であるわけではないが、美しい精神の持ち主の外貌は美しくなければならないのだ。

もっとも、モンテーニュは、ラ・ボエシ——おそらくソクラテスも——のもつ容貌の醜さは、肢体の奇形¹¹⁾による「実質的な醜さ」とは異なり、身体の細部の瑕疵や全体の不調和など些細な原因による「表面的な醜さ」にとどまるものであるゆえ、本人の精神にも他人の意見にも大した影響を及ぼさない、とことわっている。つまり、ソクラテスとラ・ボエシは、その劣った外貌にもかかわらず、気高い人格と精神を保持していたし、また、不当な偏見に悩まされることもなく、その優れた思想は、著作や伝承を通じて広く周知されていた、ということだろう。モンテーニュにとって、二人の先人は、キケロの原則の例外をなすほど稀有な精神の達人なのである。

さて、モンテーニュはその上で、みずからの容貌について次のように語る。

私は、形においても、人への印象においても、恵まれた容貌 (une apparence favorable¹²⁾) をもっていて、[...] ソクラテスの容貌とは正反対の見かけ (montre) である。これまでにしばしば、私のことをまったく知らない人が、私の風采 (ma présence) や態度 (mon air) だけを見て、彼ら自身のことで、あるいは私のことで、私を大いに信頼してくれたことがあった。また、外国でもそのことで、異様なまでのもてなしを受けたことがある。だが、なかでも次の二つの経験は、おそらく特筆に値するだろう。(III, 12, Pl. 1107 / VS 1059-1060)

11) モンテーニュにおける「奇形」の主題について、次を参照。Dictionnaire de Michel de Montaigne, sous la direction de Ph. Desan, Paris, Honoré Champion, 2004, art. «Monstres – Monstruosité», rédigé par Ph. Desan.

12) VS では «un port favorable»。

「次の二つの経験」とは、①盗賊団が正体を隠してモンテーニュの城を訪れたが、モンテーニュが歓待すると、彼らは何も盗らずに去って行ったことと、②旅の途中で騎兵隊に襲われたが、相手はモンテーニュの顔つきと物言いが率直で毅然としていたためと説明し、彼を解放したことである¹³⁾。モンテーニュはここで、パスカルの描くキリストとは対極的な存在である。パスカルのキリストは、あまりにも惨めな姿のゆえに「慈愛の秩序」における彼の偉大さが人々に理解されず、ユダヤ人社会で迫害を受け、一部の弟子さえも離反した。モンテーニュは、その優れた見かけのゆえに有徳の人物であると思われ、難局を切り抜けたのである¹⁴⁾。

ソクラテスとラ・ボエシにおける醜い容貌と崇高な精神の同居について語る文章に続く箇所では、モンテーニュは、自分の好ましい容貌について語ることで、自身の精神も気高いと主張するのだろうか。そうではないだろう。モンテーニュがここで伝えたいのは、もっぱら優れた外見のもつ威力の強さである。敬愛する二人の先人の例からも知られる通り、真に優れた精神は、キケロの命題に反して、どんな肉体にも宿りうる。逆に、美しい肉体に優れた精神が宿るとは限らないのだ。モンテーニュは先達の例の直後に、それとは対照的な自身の例を置くことで、自身の精神の不熟さを示唆しているのではないか。真に有徳な先達二人は容貌には恵まれなかった。一方、さほど大した人物ではない自分は、風采には恵まれた。そんな中身の劣る自分でも、見かけによって人はだまされる。それほど外見の美の影響力は甚大である。——モンテーニュはそう言いたいのではないだろうか。

そのように見ると、モンテーニュの外見至上主義的な主張はアイロニーを含んでいるとも考えられる。美貌は崇敬すべき価値であるが、それはその人物の内面の優劣とは独立に人の判断を左右し、その人物に（世俗的な）幸福をもたらしてしまうほどの魔力を秘めているという事実による。人は美貌を前にして正当な判断力を失うのだ。実のところ、人物の真の価値は外貌とは関わりがないのである。モンテーニュの美貌礼讃は文字通りに受け止められない。そこには、美貌の威力に対する畏敬と同時に、それへの警戒を読み取ることができる。不可視の秩序である「慈愛」という価値のみを重要視し、可視的な美を一顧だにしないパスカルほど極端ではないが、モンテーニュにも、外貌を超えて不可視な内面を見つめる視線は厳格として存在する¹⁵⁾。

13) 「彼らのなかでもっとも目立った者が覆面を脱ぎ、名を告げ、私にくり返しこう語った。「私があなたを解放したのは、あなたの顔つきや、あなたの話しぶりの闊達で毅然とした様子のせいです。あなたにはこんな不幸はふさわしくありませんでした。私も同じような目に遭ったら、どうか安全をお願いします」と」(III, 12, Pl. 1110 / VS 1062)。

14) 上の三つの引用は『エッセー』III, 12の「De la physionomie」の一部であるが、このphysionomieという語は、リトレの辞書によれば、人相や顔つきなど、単に顔面の外見や雰囲気の意味するだけではなく、「(人間のみならず)あらゆる生物の、外面および内面の諸部分の全体に由来する固有の様相」をも意味する。モンテーニュは、明らかにphysionomieをこの広い意味で想定している。

15) 宮下志朗氏は、モンテーニュにおいて、「みにくさとは、美しい魂の仮面なのである」という見解を披露している。宮下氏によれば、ソクラテスやラ・ボエシの容貌の醜さに隠れた精神の美しさは、学識に隠れた、空虚な精神へのアンチテーゼにほかならない。モンテーニュは暗に、醜い見かけに美しい精神が宿ることを、立派な見かけをもつ学識が空虚な内実しかもたないこととの対比において肯定的に主張している、ということだ。宮下氏は類比的な現

3. 思考・表現の自然さの尊重

最後に、モンテーニュにおける、思考・表現の自然さを尊重する姿勢について見ておこう。モンテーニュとパスカルの修辞論、文体論の相互関係については、稿をあらためるべき大きなテーマなので、ここではごく簡単にとどめる。

パスカルはモンテーニュの文体について、エピクテトスおよびサロモン・ド・テュルティのそれと並んで、「生活の日常の話題から生じた思考だけでできている」ために、「もっともよく用いられ、もっともよく心に染みわたり、もっともよく記憶にとどまり、もっともよく引用される」と述べている (S618)。パスカルはモンテーニュの気取らない素朴な語り口を、その内容を読者によりよく印象づけ、納得させるために効果的であると評価しているようだ。ここでパスカル自身の筆名であるサロモン・ド・テュルティが挙げられているのは、そのようなモンテーニュの文章作法に自分も倣っているという事実の表明と受け取れる。

モンテーニュの「弁論術」(rhetorique) に対する批判的態度は、『エッセー』の随所に見られる。「言葉の空虚さについて」では、こう述べられている。

昔のある弁論家は、自分の仕事は、小さなことを大きく見せかけることだ、と言った。つまり、小さな足に大きな靴を履かせる靴屋のようなものだ¹⁶⁾。スバルタであれば、ペテンや嘘を職業とする者として鞭打たれたことだろう。[...] 女性に仮面をかぶせ、白粉を塗る者のほうが害が少ない。女性たちを素顔のままで見ないことによる損害は大したものではないが、弁論家たちは大っぴらに、われわれの目ではなく判断を欺いたり、ものごとの本質を損ない、変化させたりするからである。(I, 51, Pl. 324-325 / VS 305)

ここで弁論術の定義として挙げられている「小さなことを大きく見せかけること」(de choses petites les faire paroistre et trouver grandes) という語句は、パスカルが断章 S486 で、快と美のモデルに反するとみなしたいくつかの宣伝文句について用いた「小さなことを大げさな言葉で表現する」(dire de petites choses avec de grands mots) という語句と酷似している。その箇所ではパスカルは弁論術について直接語っていたわけではないが、パスカルの「雄弁」(éloquence) についての皮肉を込めたいくつかの断章からも、弁論術について、彼がモンテーニュの考えを共有していることは明らかである。また、上の引用には化粧をする女性への言及が見られるが、『パンセ』断章 S486 では、過剰に着飾る女性の滑稽さが指摘されている。

象として、モンテーニュが、「風にまかせて転がっていく」一貫性のない文体を美しいと評価していること、また、『エッセー』という自作が加筆に加筆を重ねた「びったりとは合わない寄せ木細工」のような不細工な作品であると謙遜してみせていること、を指摘している(宮下氏の指摘にはないが、モンテーニュはしばしば自身の著作を「奇形 monstre」と評している[I, 28, VS 183; III, 11, VS 1029 など])。次を参照。宮下志朗『モンテーニュ 人生を旅するための7章』岩波新書、2019年、212-217頁。

16) 「足の形をはっきりと示す」のがよい靴である。III, 12, Pl. 1105 / VS 1057を参照(本稿にて上に引用)。

パスカルの文章の理想は、現実をありのままに表現するために、言葉を限りなく短く簡素にとどめることであり、彼によれば、そのときその表現はもっとも美しくなるのであった。だがそのような至上の美を感知するには、「よい趣味」または「繊細の精神」という資質を保持していなければならない。——これと同じ考えが、モンテーニュにも見られる¹⁷⁾。

われわれは、人為で尖らせ、膨らませ、誇張させられた魅力しか感じ取れない。自然と単純さのもとを流れる魅力は、われわれの粗野な視覚をたやすく逃れる。自然なものの魅力は、繊細で隠れた美をもっている。このような秘かな光を見出すためには、明晰でよほど曇りのない目が必要である。われわれに言わせれば、自然さとは、愚かさの近親であって、非難されるべき性質ではないだろうか。(III, 12, Pl. 1082 / VS 1037)

素朴で単純な美、すなわち自然の美は身近にあるがゆえにかえって見逃されがちであるから、これを見いだすためには、「明晰でよほど曇りのない目」(la veue nette et bien purgée)が必要であるという。この一節は、用語の類似性からして、『パンセ』の「幾何学／繊細さ」の断章(S670)の発想源であると推測される¹⁸⁾。また、パスカルの論文『説得術について』の次の一節にも、同様の考えがうかがえる。「よいものほどどこにでもあるものはない。それを識別することこそが大事なのだ。よいものはすべて自然で、われわれの手の届くところにあり、すべての人に知られてさえていることは確かだ。だが、それらを識別できないのだ¹⁹⁾」。

モンテーニュは、以上のような考えに即して、ソクラテスの飾り気がなく、日常に根づいた思考と、冷静で高ぶらない語りとを高く評価する。

われわれは、学問がもちあげるものがないすべてのものを平凡で低俗なものとみなす。豊かさを、立派な見かけと豪華さのもとでしか認識できないからである。われわれの世界は見せびらかし(ostentation)によってのみ成り立っている。人間は風によってのみおのれを誇大化し、風船のように、飛び跳ねて身を処すのである。ソクラテスは、空しい想念(vaines fantasias)を抱くことはなかった。彼の目的は、われわれに、あくまでも人生に実際に、より密接に役に立つ掟を提示することだった。(III, 12, Pl. 1083 / VS 1037)

17) ただし、モンテーニュの文体は、実際には畳語、反復に満ちていて、具体例の列举が頻繁で、ときに難解な語句も見られる。パスカルはモンテーニュの文章を自作に取り入れる場合にも、明らかに意識的に、具体例は一般化し、表現は簡潔かつ平易なものに替えている。次を参照。Jean Mesnard, «Montaigne maître à écrire de Pascal», in *id.*, *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes et synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 74-94.

18) Croquette 前掲書はこの箇所を挙げていない。

19) *De l'art de persuader*, in Pascal, *Œuvres complètes*, éd. J. Mesnard, Paris, Desclée de Brouwer, tome III, 1991, p. 427. J・メナールは、この一節とその前後に記された考えと、『エッセー』III, 13「経験について」の内容との類似を指摘している(*Ibid.*, n. 1)。

ソクラテスが、子どものような純粋な発想にかくも見事な秩序を与え、その発想をねじ曲げたり引き伸ばしたりせずに、それによってわれわれの魂の最良の成果を生み出したのは、まことに偉大なことである。彼はわれわれの魂を、気高いものとしても、豊かなものとしても描き出さない。ただ健康なものとして、しかし、真に澆刺として、完全なる健康をそなえたものとして描き出している。[...] そこ「ソクラテスの弁論」には、人為や学問から借りてきたものは何もない。もっとも素朴な者たちこそが、そこにおのれの手段や力を見出すのだ。これ以上に後ろに行くことも、これ以上に下に行くこともできない。彼は、人間の本性がどれだけ自力でなしうるかを示すことで、それを尊重したのである。(III, 12, Pl. 1083-1084 / VS 1038)

ソクラテスは、おのれの無知を自覚し、日常（愛、死、徳、正義）を題材にし、難解な用語を使わずに、友人との対話を通じて、常識の誤りを指摘し、真理探究という目標に自己と相手とを一歩ずつ近づける。モンテーニュはここに、哲学者の理想を見ている。思考と表現の自然さ、簡素さは、道徳的な高潔さをも内包しているのである。ここでのソクラテスは、パスカルが描く、みすばらしい出で立ちで他者からの侮蔑に甘んじながら、人類全体に愛を向けたキリストに一脈通じるものがある。また、パスカルは、平常の表現、謙遜な語り口を通じて聞き手に好感を与え、相手に真理を教えるのではなく、相手自身による真理探究を促すことを、弁論の理想状態とみなしたが、モンテーニュの描くソクラテスは、この目標を体現していると言えるのではないか。パスカルの思考・表現に関する思想には、モンテーニュからのきわめて大きな影響を認めることができる。

パスカルと同様、モンテーニュも、事物の外観が理性による判断をゆがめることを指摘しているが、モンテーニュにおいて、その外観の奥にある事物の本質は絶対に不可知である。

モンテーニュは、パスカルと異なり、気高い精神の現れとしての美貌を礼讃する。しかし一方で、ソクラテスとラ・ボエシという例外を通じて、真の人徳は外見の優劣とは独立であることに注意を向け、立派な外見の誘惑への警戒を示唆する。ここにパスカルの姿勢との相同性が認められる。

また、パスカル自身が明言するように、モンテーニュの自然さを尊重する文体観・言語観は、パスカルに大きな影響を与えている。両者は、弁論術への批判的姿勢と、自然な表現が真実および高い道徳性を内包しているという考えにおいても共通している。

(大阪大学教授)

付記：本稿は JSPS 科研費 17K02594 による研究成果の一部である。